

ユニセフ 大阪通信

Unicef
Osaka
Newsletter

大阪ユニセフ協会ニュースレター 2025年8月15日発行

unicef 

vol.25
No. 99

CONTENTS

UNICEF 最前線

- 2-3 今そこにある悲惨と危機 第4回
難民申請 苦境伝える難しさ
——変わるか日本の基本姿勢

- 古野喜政さん追悼
5 大阪ユニセフ協会副会長
天性の持ち味を磨き続けた人生



水と衛生

ユニセフの支援により安全な水を常時使えるようになった幼稚園で手を洗う女の子（ウクライナ、2023年11月撮影）
平和になる日が待ち遠しい

©UNICEF/UNI497905/Andriy Vashkiv

難民申請 苦境伝える難しさ

—変わるか日本の基本姿勢

6月20日は国連が定める「世界難民の日」。昨年（2024）年、日本で難民申請した人のうち、認定されたのは190人。年間1万を超える難民申請のほとんどが却下されているのが実態だ。迫害や紛争で祖国を追われ、日本に助けを求めて来る人の尊厳をどう守るか。難民はこれからの社会の在り方にも関わり、私たち一人ひとりに問いかけられる問題だ。弁護士として難民申請のサポートに当たる空野佳弘さんに、日本の現況をお聞きした。（近藤敦子）



そらの よしひろ
空野 佳弘

弁護士 1951年6月、兵庫県淡路島出身。85年に弁護士資格（第37期）。

低い難民認定率

Q) 日本での難民受け入れの歴史を教えてください。

A) 1970～80年代のインドシナ難民が始まりです。「金を出すけど……」と国際的に批判された政府が受け入れた。81年には難民条約に加入。2000年になるまでは軍事クーデターが起きたミャンマー、米同時多発テロ後は、タリバンに迫害されたアフガニスタンの少数民族が多かった。今は混乱が続くアフリカや、中国で邪教とされた宗教信者が日本に逃れてきていますね。

Q) ウクライナからはどうでしょう。

A) 補完的保護として難民認定としている。政府は従来とは別枠、政治的配慮で受け入れています。3,000人くらいになるのでは。

Q) 欧米諸国に比べ、日本の難民認定率は低い。1%未満と聞いていますが。

A) 多面的な理由があります。基本的に出入国管理庁が所管していること。入管は取り締まり機関です。本来、難民はきちんと調べて、もれなく保護することが必要ですが、「難民申請者の訴えにはだまされない」という姿勢。難民調査官にもそれがある。

しかし、国は変えようという努力はしている。おとし（2023年）から、難民認定保護基準を初めて出し、難民条約で保護する適用範囲を広げた。良いことだが、基本姿勢がどう変わるか、注視している。

Q) 難民申請者の日常生活はどうでしょうか。

A) 仕分けされます。難民の可能性があるAグループは半年くらいすると仕事ができる特定活動の在留資格が認

められ、収入がある。一方、そうではないBグループは在留資格がなく、仕事につけず、病院にも通えない。東京ではホームレスもいますよ。

難しいのは、空港で難民申請し、庇護を求めるケースです。短期の観光ビザが多いが、入国審査で嘘をついてビザを取ったとみなされ、まず入国阻止。退去命令に応じなければ入管施設に収容され、強制退去の手続きとなる。

やはり、認定にかかわる入管とは別の専門的な機関があったほうが良い。また、審査の手続きが改善されておらず、難民調査官のインタビューに弁護士が立ち会えない。どんな話をしたのか、調書を開示請求しても真っ黒。本人の思いとは違う内容の可能性がある。

背景を伝える難しさ

Q) 難民申請者の背景を理解してもらうのは難しいのですか。

言葉の問題がある。通訳が少ない。例えばアフリカ・コンゴは、同じフランス語でも発音が違い、通訳できない。裁判でアラビア語の通訳問題があったとき、専門家に来てもらったが、地域の違いから同じアラビア語でも通じなかった。今、ウェブ通訳もいるが、弁護士が立ち会えないし、難民申請者の目の前ではないだけに余計にしにくい面がある。

Q) 難民申請の審査結果が出るまでの期間は？

A) だいたい数年、4～5年かかる。早くても1～2年。

Q) 偽装難民の問題はどう思いますか？

A) 結論が出るまでは送還されない入管法規定があったが、改正で3回目以降の申請はできなくなり、送還され

ている。長期間収容所で耐える偽装者はいない。苦勞するくらいならすぐ帰っているし、他国へ行く。日本に残る人はやはり帰ると危ないと思っている人が多い。

Q) 家族の難民申請者はいましたか？

A) スーダンから来た母親と子ども 3 人を扱ったことがあります。父親の性的虐待から逃げてきた。就労できる在留資格を得たが、交通事故にあい、働けなくなった。何とか生活保護を受け、通院もできている。その後、補完的保護が認められ、5 年間の在留許可があり、子どもも安心して学校に通っている。

Q) 空野さんのお仕事は具体的に？

A) 難民申請の際の意見を書くことが多い。本国の状況、本人が置かれた立場。分析して根拠を挙げて説得するのが仕事です。抱えているのは年間 10 数件あり、大変です。2001～05 年でしたか、休みもなく、うつ病になって仕事ができなくなった。申請者が 1 国だけなら良いけど、国が違えばゼロから勉強しないといけないのでダウンしました。

難民申請が通ったら、それはうれしいですよ。サポートしなかったらどうなったか。そう思うと、うれしいですね。

共存して良い方向へ

Q) 欧州では自国第一主義が台頭し、難民排斥の動きがあります。

A) 日本も影響を受けている感じはしています。もともと厳しく対処してきた日本の行政でしたが、やっと現状を改善しようという努力が見え始めたところで、世界が

こういうふうに変化し出した。元に戻ってしまうのではと心配している。

日本がどういうスタンスをとるべきか。少子化が進んでいるなか、外国人労働力を受け入れないと経済基盤を維持できない。特定技能をあらゆる職種に広げる。難民も役に立ってもらえる。上手にやればマッチングできる。良い方向に行く余地はある。世界のなかで日本の地位が良くなると思う。

Q) 日本人は文化の違う人を敬遠しがちですが、多文化共生社会の視点からの心構えはなんでしょう

A) 忌み嫌うのは一般的ではない。日本人はもともと優しい文化の国民性を持っている。例えば、1890 年の和歌山であったトルコの軍艦エルトゥール号遭難事件しかり。昔から困った人を助けたことはたくさんある。小さな星で生まれた人びとは奇跡であり、大事にしなければならない。知らないから外国人への偏見が生まれる。理解し合う、知れば親しみはわかりますよ。

Q) 難民問題にかかわるようになったきっかけは？

A) きっかけは偶然でした。2001 年の年末、顧問をしていた教職員組合の依頼で、夜間中学の先生から難民申請中のアフガン青年が難民施設に収容され、対応してほしいということがあった。それが難民事件へのかかわりの始まりです。弁護士は依頼者に応じて勉強し、仕事をする。仕事に迫られて取り組み出したということです。

Q) 最後に、難民となる現実はどうのようなものですか？

A) 多くは異論を許さない社会で、命や重要な人権が危険に晒されます。ナチスの下でのユダヤ人のように。

コラム

難民の現場コックスバザール

100 万人以上のロヒンギャ難民（50 万人以上は子ども）が暮らす、コックスバザールの世界最大の難民居住地では、多くの家族が緊急レベルの栄養不良に直面している。子どもの 15% 以上が現在、栄養不良の状態にあり、これは 2017 年にロヒンギャ難民が逃れてきて以来、最も高い水準にある。さらに 2025 年 1 月から重度急性栄養不良の症例が上昇し、背景には栄養状態の悪化による重度下痢症、コレラやデング熱の集団感染、食料配給削減による食生活の質悪化、そしてここ数カ月間には暴力から逃れてキャンプに避難する家族が増えていることがある。劣悪な環境に拍車がかかっている。



コックスバザールにある難民キャンプ（2024 年 7 月 16 日撮影）

©UNICEF/UNI622234/Njiokiktjen